

櫻井本『夢想之連歌』訳注（一）付翻刻

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうち二番目の百韻である『夢想之連歌』は、宗祇が夢で発句を得て、祈念するところあつて詠んだ百韻であつた。伊藤と奥田は、この百韻から、宗祇の百韻の手法を説明すべく、『夢想之連歌』の訳注を試みることにした。

以下、櫻井本『宇良葉』に収録された「夢想之連歌」の翻刻を、国文学研究資料館紙焼き写真により掲げる。なお、『宇良葉』の本文全体の翻刻としては、深井一郎氏による「宗祇連歌発句集 宇良葉」（金沢大学教育学部紀要）第八号・昭和三五）、湯之上早苗氏による貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）がある。またその他に、独立に流通している、この百韻の翻刻として、江藤保定氏『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）の資料編には、東大国文学研究室本を底本とする翻刻も存するが、訳注にあたり、櫻井本の序と百韻の翻刻をあらためてなした（序の翻刻は後掲、ここは百韻の翻刻である）。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【翻刻】

夢想之連歌

1 住吉の松こそみちのしるへなれ

- 2 とを里をのゝ雪のかへるさ 宗祇
3 舟よする濱への真砂月さえて
4 こゑもむらく千とりなくなり
5 わか門のいな葉色付ふく風に
6 かきほをあらみすゝきちるころ
7 暮ふかき露のかよひ路跡たえて
8 いくへの霜を見るもすさまじ
9 遠こちのかねに目覚ていつる夜に
10 しつまるやとり人やねぬらん
11 たれとなくすゝしき月にこゑ深て
12 水にそやまのこゝろをもしる
13 風をのみ花はうらみしよしの川
14 はやくもかはるふるさとのほる
15 つれてこしちきりも鴈の別ちに
16 うかへる雲の世をはたのまし
17 道ならぬ身はわひぬるもつらからて
18 よしふりぬともかゝるよもぎふ
19 うつろへは露こそ月のみやこなれ
20 あぎのやまにや旅をわすれん
21 なく鹿にわかつま恋をなくさめて

- 22 あはさらめやのゆふへたにうし
 23 さのみやはたのめし事のあたならん
 24 うらみしこゝろ見えもこそすれ
 25 たえねたゝおもふにかなふ人もなし
 26 やすけなる身もよそ目成けり
 27 水を友山をとなりの草の庵
 28 夜ふかき霜に川かせそふく
 29 たつをしの跡をうきねのこゑ侘て
 30 ひとりや月のゆくゑをもみん
 31 わかさらむ秋の空かはまてしはし
 32 いさやいのちの後のゆふつゆ
 33 草の原名こりわすれぬ人もかな
 34 さくらうちちり里そふりゆく
 35 たちなれしかりはのかた野春くれて
 36 ありかやいつちきゝすなくこゑ
 37 雪なからかすむ外山のあさことに
 38 伊吹おろしそなみにのこれる
 39 舟わたす夜中に月はかたふぎて
 40 まつに深てのほしあひやうき
 41 あぎをちきり暮をたのむもいたつらに

┌

┌

- 42 猶いつまでのおもひならまし
43 かりの身をはしめなき世にうけ初て
44 誰をうらやみ誰をくたさむ
45 さかぬ木も時しる花の一さかり
46 山はみとりのはるふかきいろ
47 霞こくあまのつり舟遠き江に
48 はまなのはしをたゝにやはみむ
49 すみわたる月にいそくな天つ鴈
50 こ萩うつろふいねかてのさと
51 しほるなよ身に今よりの秋の風
52 夕こえくれは山そかさなる
53 ふりそむる朝の雪に駒なへて
54 かれ野をとふはたゝ宮こ人
55 やふしわかすもとめは梅や花もみむ
56 あせたるむらの春さむきかけ
57 ひまかこふ軒はのかすみ衣かせ
58 山にも身こそかくしわひぬれ
59 おもひたつひとへ心に世をいてゝ
60 あさきをきくも法ならずやは
61 わたれ人舟まつ程の水もなし

- 62 はるゝもいてぬさみたれのやと
 63 月そうき雲のいつこにふけぬらん
 64 夜はひやゝかにほたるとふそら
 65 荻に風いはぬおもひのこたへして
 66 夕のしらはいかにしのはむ
 67 待うかれ我やゆかむのみちのへに
 68 見えはや人もこゝろなからし
 69 山里の花をかへさに折わひて
 70 たつねよ又もなきさくらかは
 71 たゝになとあたら春日をつくすらん
 72 ね覚する夜のうつるたにおし
 73 音きけはよその時雨を枕にて
 74 くもらぬ月に物なおもひそ
 75 あらさすは宿にやはみむのへの秋
 76 むしのいろくみたれてそなく
 77 待いつる風のとたへに露をきて
 78 しほれもやましを舟さす袖
 79 おりたつをおもへあしかるわさなれや
 80 こひちにいかてたかふこゝろそ
 81 世やはうき誰うらめしき人ならむ

┌

┌

- 82 おいをなせめそかゝらざらめや
83 秋は時雨冬は霜夜にふしわひて
84 木葉ふりゆくあかつきのいほ
85 かけさひし嵐や月にのこるらん
86 山さむけにも松むしそなく
87 よるかたもあらしすみかに秋はきて
88 人のこゝろのみゆる夕くれ
89 よむ哥やなを身のうきを種ならん
90 おもひをのへは物ことにあり
91 さく花のかたはら遠くかすむ野に
92 はやしをしめてすめるのとけさ
93 きかしたゝ春はいくかのかねのをと
94 ひかりもかけもけにそはかなき
95 ともしするかた山川の鶺鴒かひ舟
96 水よりはやしあくる夏の夜
97 さゝなみやこゑくしのにおりはへて
98 はつ風たちぬ柳ちるかけ
99 露みたれひくらしなきてのこる日に
100 身にしむ色はたゝ秋のそら

【諸本】

『宇良葉』内に存する本百韻には、長文の文章（添書）がある。考察対象とする本百韻において、句の前に置かれていることから、この文章を便宜上「序」と称し、諸本における「序」の有無、位置を目安にして伝本を示してみる。加えて、百韻末尾には、和歌「ゆるしなき人めをいかで忘れけん神は捨てじと思ふあまりに」を持つものがあり、この歌の有無も加え、諸本を列挙する。なお、諸本の説明に頻出する「独」に関しては新字体で統一している。

序有り（百韻の前）・和歌無し

①早 早大伊地知文庫『古連歌』本（文庫20／26）：「独吟夢想之連歌并序」とあり、百韻の前に序文、「夢想」と題して百韻、百韻末尾に「延徳^{本マ}、弍年九月日」。

②書 書陵部『古連歌集』本（353―41）：百韻の前に序と題して序文、「夢想 宗祇独吟」と題して百韻、百韻末尾に「延徳二年九月日 宗祇在判」。

③大 大阪天満宮『名家連歌』本（大阪天満宮文庫69―25―1）：百韻の前に序文（無題）、その後丁を改め「独吟賦 山何連歌／宗祇」と題して百韻、百韻末尾には何もなし。

④夢 東大国文学研究室蔵本（中世12―17―2）：百韻の前に序文、その後丁を改め「宗祇夢想独吟」と題して百韻、百韻末尾には何もなし。

序有り（百韻の前）・和歌有り

⑤歴 国立歴史民族博物館高松宮旧蔵本（H600―1786ム函181）：百韻の前に無題の序文（宗祇の名末尾にあり）、無題、へ（朱引）で句を示し百韻の各句を改行することなく、連続させる書き方で書かれた百韻、末尾に「ゆるしなき人めをいかでわすれけむ／神はすてしとおもふあまりに／延徳二年九月日」。

⑥宗 書陵部『宗祇独吟連歌』本(154・515)：百韻の前に無題の序文(宗祇の名末尾にあり)、無題、百韻の各句を改

行することなく、連続させる書き方で書かれた百韻、末尾に「ゆるしなき人めをいかてわすれけん／神はすてしとおもふあまりに／延徳二年九月日」。

序有り(百韻の後)・和歌有り

⑦北 北海学園大学北駕文庫本(文365)：「夢想住吉法楽祇公独吟」と題し、発句に「御」、脇句に「宗祇」と名を付

した百韻、百韻末尾に続き「ゆるしなき人めをいかて忘けん／神はすてしとおもふあまりに」、その後序文(無題、署名なし)。

⑧東 東大国文学研究室蔵『連歌名句』本(D1613)：「夢想住吉法楽祇公独吟」と題した百韻、発句に「御」、脇句

に「宗祇」と名を付された百韻、末尾に「ゆるしなき人めをいかて忘けん／神はすてしとおもふあまりに」、その後序文あり。

序有り(百韻の後)・和歌無し

⑨広 広島大学福井文庫本(国文/5051/N70)：「住吉参籠之時自脇独吟／夢想」と題し百韻、発句に「御」、脇

句に「宗祇」と名を付し、百韻末尾に小字にて序(その末尾に「宗祇」、さらにその後ろに二字下げで、次のような百韻の張行年次に関する後人の覚えを置く。太田武夫本による昭和十二年書写の新写本。

此百韻齡古稀のよし侍れは明応元頃にや写本端

つくりには享録^(マ)五極月と云々は筆者のしるせし時

のを心無はしにせるせしにや

⑩静 静嘉堂文庫本(連歌集書29所収本)：「住吉参籠之時自脇独吟／夢想」と題し百韻、発句に「御」、脇句に「宗

「祇」と名を付し、百韻末尾に序、（その末尾に「宗祇」）、さらにその後ろに二字下げで、次のような百韻の張行年次に関する後人の覚えを置く。

此百韻齡古稀のよし侍れは

明応元頃（一四八二）にや写本端つくりには

享録（一四八二）五極月と云々これは筆者

のしるせし時のを心なくはし

にしるせしにや

序有り（行間書き込み）・和歌有り

⑪甲 大阪天満宮（れー甲ー6）本：「夢想之連歌／宗祇」と題と名を入れ、百韻の冒頭部分に序文を朱で書き込んだ百韻、朱で脇句に「宗祇」と名を付す。百韻の後「ゆるしなき人めをいかて忘れけん／神はうけしとおもふあまりに」（朱にて「うけ」右傍に「すて」）、「延徳二年九月日」とあり。なお、製本の際、上部を裁った関係で、序の各行の一字目がほぼ欠けている。

序無し・和歌有り

⑫小 小松天満宮蔵『集懷紙』本：「夢想之連歌第三万宗祇」と題して百韻、百韻の後、「宗祇詠一首／ゆるしなき人めをいかて忘れけん／神はすてしと思ふあまりに」、序文無し。

⑬滋 大阪天満宮滋岡文庫本（れー5ー34）：『時代連歌』内「夢想之連歌」。「夢想之連歌／宗祇」と題、署名を付した百韻、朱にて発句に「御」、脇句に「宗祇」とあり、百韻の後「ゆるしなき人めをいかてわすれけん／神はうけしとおもふあまりに／延徳二年九月日（朱）宗祇七十歳歎」、序文無し。

序無し・和歌無し

⑭鳥 太宰府天満宮蔵小鳥居家本（連歌74-72）：「夢想 独吟」と題した百韻、脇句に「宗祇」とあり、百韻の後

「延徳二年／九月日 宗祇／在判」、和歌無し、序文無し。

⑮天 天理図書館綿屋文庫本（れ4・2-41）：「延徳二年九月／独吟／賦夢想連歌／宗祇」と題する。第35句欠（空

欄）、第九十八句欠（「落句アリ」と頭書）、百韻の後に「延徳二年九月日／本ニ云天正五年丁丑六月迄八十八年二成」。

なお、各種データベースに掲載の早大伊地知文庫蔵『連歌集』（20 00031）におさめられた宗祇独吟は、早大ホームページ記述にある『延徳二年住吉法楽夢想何人百韻』ではなく、本式連歌（発句「ひかしけふ松のおもはむ老の春」）である。

本百韻は、冒頭に長文の「序」を持つ。本稿ではこの序の部分の訳注をなす。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の『夢想之連歌』である。対校本は諸本の部分を参照された。
い。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻を適宜参照された。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、【校異】においては、前掲諸本の略号により、校異を示す。表記による違いはとらないが、読み方により意味が複数生じると思われるものは記した。例えば、「かなと」は「か、など」「かな、と」の両義が考えられるので、校異にあげた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

【翻刻】（校異の際の便宜を意図して各行頭に数字を付している）

- 1 いにしとしの冬つかた雪あられひ
- 2 まなきころ月のかけ星のひかり
- 3 もたとくしく夜ふかき松のひゝ
- 4 きさへなこやかならぬあさのふす
- 5 まさえとをりあれゆくかけのよも
- 6 きのまろね。夢のかよひもたえは
- 7 つるころいかにねし夜かなといふ
- 8 やうにさまことなる人発句を
- 9 うちすんすると見えてめさめぬ
- 10 すなはち下句をつき侍しをおもへは
- 11 はかなしやこのみちにふるゝものかゝる
- 12 夢見ることはつねの事とおもひな

- 13 からもさすかにさしをきかたくは侍
14 れとちかきとしころは世のうき
15 ふしもかきりなきにうちそへみた
16 り風いと、しくてことの葉草
17 いろおとろへこゝろのたねもくちはて
18 ぬれはおもひつゝけんも物うくて
19 すき行くほとに年くれ春かへり
20 あきさへなかはすきぬよはひすてに
21 いにしへもまれなるとしにあた
22 りよる／＼のねさめこゝろほそくて
23 荻のをと鴈のなみたにもよほさるゝ袖
24 のうへやらんかたなしたゝおもふ事とては
25 こん世のたひのいそきなりさる
26 はいま一たひ神にまかり申も
27 せまほしきを手向の物又なにごと
28 をかいと心のぬさのとりあ
29 へすこしかたの二句につゝり
30 そへてまよはんみちのしるへ
31 にもとおもふ心しかなり

【校異】

- 1 の前…甲「延徳二年住吉夢想百韻序」(朱)
- 1 いにし…甲□にし 夢往
- 3 も…甲ナシ 松…夢松風 甲□
- 4 あさ…早床、書広麻
- 5 さえ…大寒、甲の寒さ とをり…静かへり あげ…歴宗北東甲あれ ゆく…甲ける 蓬…甲□
- 6 は…書早の、大夢歴宗北広静東甲ナシ かよひも…早書かよひち 甲通路も
- 7 など…早書なと、かなと…広静哉と
- 8 やうに…静よふに こと…夢はかり、東北も 人…夢人の、甲□ 発…甲ほ
- 9 すん…早えん、歴宗きか る…広静ナシ 見えて…広静みて ぬ…大ナシ
- 10 つぎ…早つきて、書甲読 侍し…広侍る を…甲と
- 11 はかなしや…夢ナシ甲□かなしや ふる…書ゐる、広ふるく もの…大北東もの、かかる…早広静ナシ
- 12 事と…夢事とは、歴宗ことく、広静如く は…東北ナシ
- 13 なからも…早書大夢歴宗広静ながら、甲ながら□ さすかに…甲□すかに さし…夢うち かたくは…早書甲かた
く 侍れと…甲侍れは
- 15 うちそへ…夢そへ、広静うちそへて 甲うち□へや 大うち
- 16 草…早の、夢草の て…広なり、甲ナシ
- 17 いろ…夢色も たね…夢種^花 くち…大たへ
- 18 おもひ…甲□ひ つゝけ…早付 物…大ナシ う…歴□
- 19 すき行くほとに…甲過行候日毎に くれ…甲ふり

- 20 秋…書神 なかは…早書なかはに すきぬ…大過ぬ^也 よはひ…甲□ すてに…歴宗までに
- 21 いにしへ…夢往古 も…早ナシ、大広静にも 年…甲年頃
- 22 り…歴宗北東甲りぬ 大りて よるく…静甲よなく
- 23 をと…早書こゑ なみた…甲□ …早書夢北東広静ナシ、甲□
- 24 うへ…夢たえ やらんかたなし…東北やらんかたもなし、甲やゝやむ方なし と^〇は…早とてては、歴宗くは 東
北甲とは
- 24 〵 25 た、おもふ事と^〇はこん世のたひのいそきなり…広静ナシ いそきなり…甲御□き也
- 25 なり…書在也、大のみなり、夢のてなり さる…早され
- 25 〵 26 さるはいま…歴宗さらはいさ
- 26 一たひ…大やたひ まかり…早書まいり もせ…早書さ、歴させ、夢すもせ
- 27 を…夢ナシ 又…早書ナシ
- 27 〵 28 なにことをか…早なにことをかこゝろと、書なにことをかほと、大何事かほと 広静何かほと 夢あらはと
- 29 へす…大夢広静へすなから いと…早書大夢広静甲ナシ ぬさの…書北東ぬさ 広静幣
- 30 しるへにも…大指図に
- 31 しかなり…早さしなり、書さら也、広静しかり 東をかけり (序末の署名) 宗祇なし…歴宗広静甲宗祇
- 31の 後…甲「よしなき…／…」

【本文】 去にし年の冬つかた、雪・あられひまなき頃、月の影、星の光もただどしく、夜深き松の響きさへなごやかならぬ、朝の衾冴え通り、明けゆく影の蓬のまろねは、夢の通ひもたえはつる頃、いかに寝し夜かなといふやうに、様

ことなる人、発句をうちずんずると見えて目覚めぬ。すなはち下句をつき侍りしを、思へばはかなしや、この道にふるもの、かかる夢見ることは常の事と思ひながらも、さすがにさしをきがたくは侍れど、近き年頃は、世のうきふしも限りなきに、うち添へ乱り風いとどしくて、言の葉草、色おとろへ、心の種も朽ちはてぬれば、思ひ続けんも物うくて過ぎ行くほどに、年暮れ春かへり、秋さへ半ば過ぎぬ。齡すでにいにしへもまれなる年にあたり、夜々の寝覚め心細くて、萩の音、雁の涙にも、もよほさるる袖の上やらんかたなし。ただ思ふ事とは、こむ世の旅の急ぎなり。さるは、今一たび神にまかり申しもせまほしきを、手向の物又何事をか、いと心のぬさのとりあへず、越し方の二句につづり添へて、迷はん道のしるべにもと思ふ心しかなり。

【語釈】

○去にし年：過ぎ去つた年、往年。「去にし年根こじて植ゑし我が宿の若木の梅は花咲きにけり」（拾遺集・雑春・題しらず・中納言安倍広庭・108）。○冬つかた：冬ごろ。前年の冬にこの百韻の発句を夢に得、脇をつけたことになる。この百韻の発句を得た延徳元年（一四八九）の冬には、宗祇は十月十五日から十一月十一日まで、有馬温泉に湯治に出かけている（実隆公記）。また、連歌会所奉行であつたが、十二月一日に老齡を理由に辞意を述べ、明智頼遠を後任に推挙した。頼遠の辞退により、七日には松梅院禪子の推挙した兼載が候補にあがり、同月十四日、奉行は兼載に決定している（北野社家日記（松梅院禪子記））。○雪・あられひまなき頃：雪や霰が絶えず降る頃。「霜月の十日なれば、紅葉も散りはてて野山もみどころなく、雪霰がちにても心細く」（狭衣物語）。「雪あられひまなき内に年こえて／吹もかはらぬ風のさむけさ」（永原千句第一百韻・47／48・宗坡／宗祇）。○たどたどし：薄暗くわかりにくいさま。連歌においては宗砌や宗長がよく使う、散文脈の言葉。光量からいつても、あまり明るくないか。「星月夜のたどたどしきに、烏帽子のきと見えたる」（狭衣物語）。「暮はつる道のゆくゑはたとく／＼いかてか月のをそく出らん」（文明十二年千句第九百韻・68／69・其阿／通載）。○松の響き：松を吹く風の響き。「すゝみに来つゝくらす木のもと／山ちかき松の

ひゝきはことなれや」(伊庭千句第一百韻・10/11・宗碩/聴雪)。○なごやかならぬ…穏やかではない、激しい。ここは夜更けに松風の音が激しく響くこと。「夕暮は松をそしのふ山さへもなごやかならぬ椎の風に」(草根集・山家夕嵐・7358・享徳元年二月五日詠)。○蓬のまるね…雑草の生い茂る中で旅寝をするさま。まるねは着物を着たままごる寝すること。「空しく蓬の丸寝にて明しぬ。今日よりは松の色も、都には似ずぞなりにける」(春の深山路)。「あれたる所に一宿するをよもきのまろねといはんはさらにたかひ待るましきにや」(花鳥余情)。「蓬」に「よも」をかけて、現実には会えないさまを響かせる。「ましてしばし鳥だになかで明くるよのよもぎのまろね露もわりなし」(柏玉集・初逢恋・1422)。「うきかすを露にそとらむあふことはよもきの丸ねしちらすとも」(草根集・寄車恋・2157・永享六年四月二十日詠)。○いかに寝し夜か…古今集の和歌「よひよひに枕さだめむ方もなしいかにねし夜か夢に見えけむ」(恋一・516・詠み人しらず)を使った表現。夜毎枕をどちらに向けて寝たらよいかわからない、どのようにして寝た夜に、あの人が夢に見えたのだろうか、との歌意から、奇瑞が起きて発句を得たことを、驚きの意識で形容する。「今朝はまたいかにねしよの名残ぞとあふとみえつる夢をしぞおもふ」(雪玉集・寄朝恋・2037)。○様ことなる人…不思議な様子の人。人間ではなく、神であろうと示唆する。発句から、住吉明神とおぼしい。「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずることはべりしかば」(源氏物語・明石)。○さしおきがたく…放っておきにくく。「さしおく」は後回しにする。放っておく。○世のうきふし…世にある様々なつらいことや悲しいこと。「くれ竹のうきふししげき世の中にあらじとぞおもふしばしばかりも」(和泉式部日記・145・敦道親王)。○乱り風…風邪。「にはかにいと乱り風邪のなやましきを、心やすき所にうち休みはべらむ」(源氏物語・真木柱)。○言の葉草…「言の葉」に縁語「草」を重ねた表現。古今集の仮名序から表現をとり、言葉、和歌を表すもの。謡曲に多くみられる表現。「うかかるとたよりを松が枝の、言の葉草の露の玉、心をみがく種となりて、言生きとし生けるものごとくに、言敷島の蔭に寄るとかや」(高砂)。「諸人のことの葉くさの庵まであまかけりてや神はうく」(言月草・神祇・101)。○心の種…古今集仮名序の冒頭の表現より取った、歌の内容に関する比喩。「大和歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」(古今集仮名序)。「言の葉

「草」の色が衰え、「心の種」も朽ちると表現することで、自分の詩歌（ここでは連歌）は、詩想が枯れ果て、表現も拙劣になつていくといつていい。「木のもとも人の心のたね散て松葉はきとれ住吉のかみ」（草根集・名所浦・936・長祿元年八月二十九日条）。○いにしへもまれなる年…七十歳。「人生七十古来稀ナリ」（杜甫・曲江）による表現。この百韻は、延徳二年（一四九〇）、宗祇七十歳の年の九月某日に完成している。「よはひの程は いにしへも 稀なる年に こえしかと」（春夢草・2130）。○荻の音：秋風が荻の葉を鳴らす音。荻の葉音はもの思いをさせる音でもある。「五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠るるけしき、荻の音もやうやうあはれなるほどになりけり」（源氏物語・篝火）。「あきかぜのややはださむくふくなへに荻の上ばのおとぞかなしき」（新古今集・秋上・堀川院に百首歌たてまつりける時・355・藤原基俊）。「夕月夜かげ更けゆけば荻の音もやうらがなしほし合の空」（宗祇集・秋（七夕）・94）。○鴈の涙：露を鴈の涙に見立てた歌語。「なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ」（古今集・秋上・221・詠み人しらず）。「なべて世の人より物をおもへばや雁の涙の袖に露けき」（新千載集・哀傷・弘徽殿女御かくれ侍りにける秋かりのなくをきかせ給うて・2218・花山院）。「こぼれて匂ふ萩の上露／夕暮や雁の涙も時雨らむ」（新撰菟玖波集・719／720・日晟法師）。「幽玄に長高く候ふなど申す句、いかやうに侍るべきとならば、鴈のなみだやともに落つらん／色かわる秋のは山の夕日影」（長六文）。○やらんかたなし…どうしようもない。「ふかくしも契りもおかず明けぬとてやらん方なき心まどひに」（洞院摂政家百首・恋・1282・但馬）。○こむ世の旅…「こむ世」は来世。来世への旅、すなわち「旅」は来世に向けて歩む、現世の歩み。古希を迎え、残りの人生をこのように言う。「玉のをのかきりいまはとしらせはや／かけしこん世もわすれやはする」（永原千句第九百韻・37／38・氏安／定秀）。「何方を旅の行末にせん／又もかく生れは世のうき身にて」（老葉・雑下・1369／1370）。「ちはやぶる神にたむくることのははこん世の道のしるべともなれ」（長秋詠藻・述懐・472）。○急ぎ…準備。○幣…神に捧げる幣帛。「心の幣」は、連歌の上達を願う気持ちから、心中で神に捧げるつもりで作っている句。「年代をへてあふぐ日よしの神がぎに心のぬさをかけぬ日ぞなき」（風雅集・神祇・2147・前中納言為相）。「波風もおもふかたと朝夕の心のぬさは神そうくらん」（再昌・永正六年三月七

日詠)。○とりあへず…慌ただしい様。即刻。しかし「いと」を使うことで、ここは句が思ったように早くもできない様をいう。また、このあたり、「手向け」「幣」「とりあへず」と縁語をちりばめている。「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」(古今集・羈旅・420・すがはらの朝臣)。「あらましの心のうちのたむけ草まつとはしるや住吉の神」(嘉元百首・松・1882・定為)。○つづり…(句を) つらねて。○道のしるべ…連歌の道の手引き。導き。「高砂や心のまつになりぬらむ／道のしるへもうらかなしけり」(宗長追善千句第七百韻・93／94・荒木田守武)。

【現代語訳】

昨年の冬の時期、雪やあられが絶え間なく降るころで、月影や星の光も、はつきりせず、夜更けの松風の音までも激しく聞こえてくる、そんな夜が過ぎた朝に、夜具までも寒さがしみわたり、明けていく日の光の中、雑草が茂る荒れた場所で旅寝をしていると、夢の通路もとだえてしまうその時に、まるであの古今集の歌の言葉「いかに寝し夜か」のように、いったいどうして寝たらあの人が夢に見えたのだろうか、普通と様子の違う人が、発句を口ずさんでいると見えて、目がさめた。すぐさま下の句をつけましたが、なんと思えばはかないことよ、この連歌の道に触れている者ならば、このような夢を見ることは普通の事なのだと思いますが、そうはいつても、うちやっておきにくはございませが、近年は、世を生きる上でつらく悲しい出来事が数限りなくあり、加えて風邪もさらにひどくなって、私の連歌は表現も拙劣に、詩想も朽ち果ててしまったので、思い続けることも物憂く思われるまま過ぎていくうちに、年が暮れ、春が終わり、秋までも半分過ぎてしまった。私の年齢はすでに、昔でもまれな七十歳という年になっており、夜毎の寝覚めに心細く思われ、荻の葉音や雁の涙につけても、涙を流してしまう袖の上のさまは、どうしようもない。

ただ、思う事といつては、この百韻を仕上げることというのは、来世へと続くこの世の旅における、旅支度なのである。そうであるならば、(死ぬ前に) もう一度、歌の神に(詣でて) おいとま申しあげることもしたいのだが、手向けの物としては、やはりこの百韻であろう、また他に何事をささげることがあるだろうか。心中、神に捧げんと付けてい

く句は、そんなに速く作り上げることができないのだが、以前の二句に、句を連ねて添えて完成させ、迷いやすい連歌の道の道しるべにでもしようと思う気持ちは、こんなふうなのである。

【語釈】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本（『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号による。連歌等の引用は、以下に示す諸本によった。

【訳注引用文献典拠一覧】

- 狭衣物語：新編日本古典文学全集
永原千句：古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）所収菅原神社本
文明十二年千句：愛媛大学古典叢刊3『大山祇神社 法楽連歌上』（昭和四五・愛媛大学古典叢刊行会）
春の深山路：新編日本古典文学全集
源氏物語：新編日本古典文学全集
新撰菟玖波集：『新撰菟玖波集全釈』
伊庭千句：『千句連歌集七』（昭和五三・古典文庫）
花鳥余情：『源氏物語古注積叢刊第二巻』
長六文：『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）

【参考文献】

- 柵町知彌「宗祇・兼載伝小見―松梅院禅予の日記より―」（『近世文学 作家と作品』（一九七三・中央公論社））
本稿はJSPS 科研費 JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。